

2024 年度 北海道雪氷賞

「北の風花賞」

張 佳晏 氏（北海道大学低温科学研究所・北海道大学環境科学院）

論文名： 「アラスカ南東部タク氷河が前進から後退に転ずる時期の
氷河末端位置と流動速度の変化」

選考理由： 多くの氷河が後退を続ける中で、著者はアラスカにある特徴的な挙動を示す氷河に着目しました。本論文は、質量損失の加速が著しいアラスカの氷河において、近年まで唯一前進していたが近年後退に転じたタク氷河について、人工衛星データを用いて詳細に調べています。解析の結果、前進から後退に転じるタイミングが氷河末端のセクションごとに異なることを明らかにし、その原因として、氷河湖の形成や表面流動速度の変動等の影響について論じています。南東アラスカ大学との国際共同研究の枠組みを活かした実地観測を実施するなど、今後のさらなる研究の発展が見込まれることから、「北の風花賞」受賞論文として選考されました。

「北の六華賞」

千葉 隆弘 氏（北海道科学大学工学部）

論文名： 「北海道における雪による人身事故の発生状況について
-2020 寒候年以降における事故の発生状況と拡大要因に関する分析-

選考理由： 近年の北海道における、屋根の雪下ろしに起因する人身事故は、積雪の多寡にかかわらず高い割合で推移していることから、その原因究明が期待されていました。本論文では各種統計資料を用いることで、雪による死傷者数と積雪状況との関係や、高齢化率との関連等が調査され、高齢化率の増加が雪による人身事故リスクを高めていることが明らかとなりました。さらに、札幌市と秋田県横手市の木造住宅の屋根雪処理の違いに注目し、雪下ろしのためのはしごや雪止めが設置されない札幌市では、雪下ろし事故が拡大していることを指摘しました。北海道と本州の建築文化の相違が雪下ろし事故の原因に関連していることを示した点は独創的であり、将来の事故の軽減に寄与する、社会貢献の期待される研究です。このことから、北海道の雪氷研究に貢献する論文として、「北の六華賞」の受賞論文として選考されました。

「北の蛍雪賞」

苫米地 司 氏（北海道科学大学）

受賞名： 建築物と雪害に関する研究の発展ならびに支部活動への貢献

選考理由： 苫米地司氏は、1981年の「56豪雪」を契機に、建築と雪をテーマとした研究に長年取り組み、それまで研究が十分に進んでいなかった建築物と雪害の分野の発展に大きく貢献されました。模擬雪を用いた吹雪風洞装置を開発し、吹雪風洞実験に基づいて屋根積雪形状の形成要因、屋根雪庇の防止技術、住棟周辺の吹きだまり対策についても多くの成果を挙げられました。また、大規模なドームなどで用いられる膜構造建築物を対象に、滑雪を利用した屋根雪処理方法に関する研究を通して合理的な屋根積雪荷重の評価を推進され、雪氷学のみならず、積雪地域に適した建築物の発展に多大な寄与をされました。

さらに、2015年度から2018年度までの4年間にわたり日本雪氷学会北海道支部長を務めるとともに、長年にわたり北海道支部研究発表会で発表を重ね、後進の指導にも尽力されるなど、日本雪氷学会北海道支部の発展に重要な役割を果たされました。以上の功績を称え、苫米地氏に「北の蛍雪賞」を贈呈いたします。

「北の蛍雪賞」

松岡 直基 氏（北海道気象技術センター）

受賞名： 雪氷災害に対する研究の発展ならびに防災活動への貢献

選考理由： 松岡直基氏は、1975年に財団法人日本気象協会北海道支社に入社後、株式会社北海道気象技術センターに所属し、大雪や吹雪による雪氷災害の気象特性に関する研究に取り組むとともに、気象予報士として防災に関する普及啓発活動に尽力されています。

特に、甚大な被害のあった2013年3月の猛吹雪と、比較的被害の小さかった翌年の吹雪を比較し、気象条件の違いだけでなく、防災情報の改善や住民意識の向上が災害被害軽減に寄与したことを明らかにされました。このような成果を社会に還元するため、一般市民から行政防災担当者まで幅広い対象に講演を行い、インフラ管理者に対してはメール等により暴風雪への警戒の呼びかけを早期に行うなど、積雪寒冷地の安全な社会生活に貢献されています。また、気候変動の影響下で激甚化する北海道の気象現象の予測に向け、経営者として2019年から2024年にかけて北海道大学大学院理

学研究院に「北海道気象予測技術分野」についての寄附講座の設置に尽力され、雪氷災害への関連が深い気象・気候分野においても多大な功績を挙げられました。

さらに、毎年日本雪氷学会北海道支部研究発表会での積極的な発表に加え、支部評議員や日本雪氷学会の監事を務められるなど、日本雪氷学会北海道支部の発展にも寄与されました。

以上の功績を称え、松岡氏に「北の蛍雪賞」を贈呈いたします。

以上